研究

山陽道探究 ～邂逅編～

会員 西村修一

プロローグ

『日本書紀』（七二〇年成立）天武十四年（六八五）九月の条

「甲寅（十一日）に、宮処王・広瀬王・難波王・竹田王・弥努王を京及び畿内に遣わして、各人夫の兵を校えしめたまふ。

戊午（十五日）に、直広肆都努朝臣牛飼を東海の使者とす。直広肆石川朝臣虫名を東山の使者とす。直広肆佐味朝臣少麻呂を山陽の使者とす。直広肆巨勢朝臣粟持を山陰の使者とす。直広参路真人迹見を南海の使者に、直広肆佐伯宿禰広足を筑紫の使者とす。各判官一人、史一人、国司・郡司及び百姓の消息を巡察せしむ。」

カゲトモは、光つ面の約で、日のあたる面の意味。

「山陽道」という表記ではないが、同年七月条に、「辛未（二十七日）詔して、『東山道は美濃より以東、東海道は伊勢より以東の諸国の位の有らむ人等に、並に課役を免せ』とのたまふ。」と、「東山道」「東海道」という表記が現れているので、「山陽道」としても変わりない。初見としてよい。

白村江の戦後の七世紀後半の天智、天武朝における中央集権的な地方行政の端緒であり、のちの律令国家において発展してゆく。

律令時代の「―道」は、北海道、道州制などのように、日本の地方区画であり、いわゆる五畿七道と言われ、大和、河内、摂津、和泉、山城の中央（畿内）と、東海道・東山道・山陽道・山陰道・北陸道・南海道・西海道から成る。「山陽道」は、すなわち、播磨国、美作国、備前国、備中国、備後国、安芸国、周防国、長門国であり、また中央から放射状に延びる街道もそのように呼んだ。

山陽道は、「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府と本朝廷（都）とを結ぶ特別重要な街道であり、大路、中路、小路という格付けの中で唯一の「大路」扱いである。別格なのである。

街道には駅が置かれ、周防国には八駅があった（『延喜式』〈十世紀〉による）。石国（岩国市関戸）、野口（玖珂郡野口）、周防（光市小周防）、生屋（下松市生野屋）、平野（周南市平野）、勝間（防府市勝間）、八千（山口市鋳銭司）、多宝（山口市嘉川）。

原則三〇里（約一六キロ）ごとに駅家が設けられたという。参勤の一日の行程である「宮市本陣（防府市）―福川本陣―花岡御茶屋」間の前後半の半日の区間が一六キロぐらいなので、ほぼ等間隔である勝間駅（防府市）―平野駅―生野屋駅は、現比定地として妥当と言える。

かつてＮＨＫＢＳの朝八時から、「街道てくてく旅」という元アスリートが日本の有名な街道を旅し、現地から中継生放送するという番組があった。二〇〇九年は元シンクロナイズドスイミング選手で北京オリンピック銅メダリストの原田早穂さんが山陽道を歩いた。大宰府から平城京までというから、これは律令時代の「山陽道」想定である。

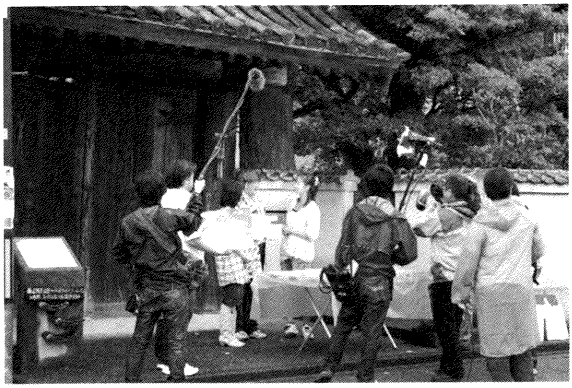
律令時代の山陽道がどの辺りを通っていたかははっきりとせず、周陽地区に神武伝承地や「馬屋」などの地名が残るので、この付近かとも推察できるが不確定である。実際に原田さんが歩いているのは近世の参勤交代で知られる山陽道だったので、違和感があった。

六月四日は福川宿、五日が徳山城下、八日花岡宿、九日呼坂宿の日程で周南地区を中継車は移動していった。

福川本陣ではシティケーブル周南（ＣＣＳ）の山崎道

子アナと私がホスト役として対応した。

オファーは一年前から観光政策課のほうにあり、徳山城下の次候補先などを私は下請けのディレクターさんをあちこち案内して回った。年が明けると、大型放送中継車の駐車の確保やズームアップするための遠隔地のカメラ設置場所など、下準備の段階から土地勘とコネのある私が大いに助けた。本番では、朝六時からリハーサル。七時から原田さんが合流して打ち合わせとリハ。交通費もなく、記念品だけだったのは、さすがNHKだと思った。



2009.6.4.　てくてく旅リハーサル　福川本陣

「周南市」が誕生して間もない頃で、「周南市」という名前を全国に知ってもらえる絶好のチャンスであり、市関係者もたくさん応援に駆け付けていた。放送が終わって、県外からも電話を頂き、ここでもさすがに全国放送と思ったものである。

寄り道をさせて頂きたい。冒頭『日本書紀』を引用したが、二二歳の頃、一時郷里に戻っていた私は、無性に『日本書紀』が読みたくなって、市民館の隣にあった徳山市図書館で、岩波「日本古典文学大系」を探していた。史料的書籍なのに貸し出し中なのに驚く。諦めきれない私に、職員が収蔵庫から古びた『日本書紀』の解説書を引っ張り出してきたが、まず解説が文語体であり、旧字体や印刷の悪さで満足に読めない。地元の書店「鳳鳴館」に問い合わせると、二、三週間かかるという。ハタと困った私は、あることを思い出した。徳山高校の美術の藤永俊雄先生が「徳山は日本一の非文化都市である。しかし、一つ誇ってよい文化施設がある。それがマツノ書店

である」と言っていた。私はマツノ書店に電話した。「すぐに欲しいのなら、山口市にある書店か、広島のそごう百貨店にある書店に行くしかありません。私は交通の便を考慮するなら、広島のそごうを推薦します」と明快な返答を頂いた。思うに、店主の松野久氏だったと思う。

マツノ書店は二〇〇七年に、郷土史に関する古書の復刻など（二〇〇点以上に及ぶ）長年の功績に対し、菊池寛賞を受賞された。

私はこの日を『日本書紀』との出会いの記念日にするために、すでに遅い時間ではあったが敢然と広島に向かった。電車の片道だけでも一時間四五分かかり、帰るときにはとっぷり日が暮れていたが、本を抱えるように電車の中で何度も開いては感動した。日本にはすごい宝がある。

京都に還っていた私は、『日本書紀』の全訳が出たことを新聞で知った。全訳本はそれまでなかった。待望の企画が宇治谷孟氏の『日本書紀—全訳現代文』（全二巻 創芸出版　一九八六）である。よく『日本書紀』は「原文で読むべきである」といった斜に構えた意見があるが、私もそうは思うが、それは何段階も経てからで十分である。先ずは出会うこと。『三国志』ですら、私は横山光輝さんの漫画から入って、「宋紹熙本」に至ったのである。とっかかりは、アニメでも人形劇でもわかりやすいのが良い。

宇治谷氏は京都在住の先生だったので、徳山の体験も伝えて、刊行の快挙を讃えた。以後、お付き合いが始まり、講談社の文庫本刊行に際しては校正などのお手伝いができた。自宅にも招いていただき、私の京都時代の師である。葬儀にも出た。『続日本紀』（講談社学術文庫 一九八八～九五）まで刊行されている。先生は大阪の高校で教鞭をとられた後、滋賀文教短大で教えられていた。巷に全訳本が存在しないことに自分がやるしかないと奮起された。学術にとどまらず、マツタケの人工栽培とか多才であり、世間が求めていて成し遂げられていないものに意欲を持たれていたのだ。「世が待っている」が先生の口癖であった。

天武朝から律令時代を通して発展していく地方行政区画や山陽道の発展を研究するには、『日本書紀』や『続日本紀』が基本であることはあらためて言うまでもない。

邂逅

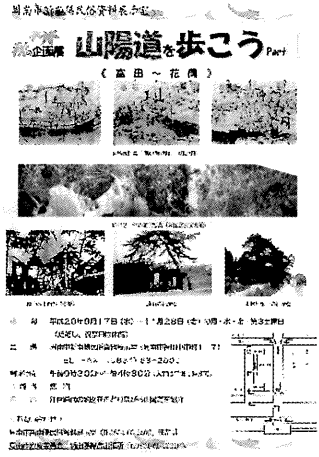
私が山陽道に取り組んだ端緒は、「徳山地方郷土史研究」第二九号の対談「遠石の歴史を語る」に登場している山田太郎氏にある。郷土誌『私達と遠石』の刊行など郷土史に尽力されていた。紙面で「現代の語り部」と紹介されているように、徳山の昔をよくご存じである。今年、下松地方史研究会で発表さる元気な姿を久しぶりに拝見して嬉しかった。

徳山高専の工藤洋三教授は二〇〇七年当時、何度も渡米され、米国公文書館より徳山地方の空襲前の航空写真を入手されていた。建物等が立体的に見える道具を駆使されて、この建物はなんであるかとか、戦前の徳山の町並みを明らかにしようとされていた。研究会が徳山銀座にある「高専夢広場」の二階で定期的に開かれていた。戦前の建物に詳しい元海軍の山田太郎氏（戦前の徳山は海軍要港とされ、呉の支部など海軍関係の建物がけっこうあった）が招かれていた。その他に、建築の専門家である徳山高専の中川明子助教、文化財建造物保存技術協会の太田英一氏、徳山の古い写真や絵葉書の収集家である内山孔二氏、民俗資料展示室の私が参加していた。

面識ができた中、山田氏が私と工藤先生に山陽道を案内したいと申し出られた。私は山田氏と工藤先生を車に乗せて山田氏のナビのまま、周南市や下松市をあちこち回った。山田氏は律令時代の山陽道を研究しておられて、福田寺（福田寺原）―専宗寺（久米）―日天寺（高橋）という自説のコースを披歴された。フランシスコ＝ザビエルが通ったという持論をお持ちのようだった。工藤先生の航空写真は周囲を驚かせる初めて見るもので、戦前の道がくっきり見えて、山陽道の研究への新しい活用法と展望を感じ始めた頃である。のちに、山陽道だけでなく郷土史研究上の重要な資料になったことは言うまでもない。

その日、山田氏は私たちを自宅の夕食に招待され、栗御飯と松茸の御吸物と香物という純日本風の食事でもてなされ、私は少なからず感動した。今でも妙にこの光景を思い出すのである。山田氏は「あとは二人に託したい」という決意を述べられて、私には山陽道に関するご自分のすべての資料を渡された。

「託す」と言われてもなあ、私に何ができるのだろうと後日、自問していた。私が籍を置いていた新南陽民俗資料展示室は春秋の年二回、企画展を開いており、地元には新南陽市時代の市文化財指定の第一号である福川本陣があり、本陣の模型や江戸時代の長持、箱枕、金舛、提灯、漆器類などの本陣関係の資料を展示したコーナーがあったので、山陽道は採りあげなければならないテーマだと常々思ってはいた。なら、このタイミングとばかり、二〇〇八年の春秋の企画展は「山陽道を歩こうⅠ 椿峠～富田」「山陽道を歩こうⅡ 富田～花岡」に決めた。



工藤先生と徳山高専の協力を得て、夜市から久米までをフォローする大航空写真を提供してもらった。本邦初公開で、その迫力もあって話題を呼んだ。たくさんの方に足を運んでもらった。

準備中に、いつも企画展の取材に来てくれる地元のCCSの白石清史氏から自社の情報番組の中の一コーナーで、シリーズで採りあげたいとの相談があった。カメラマンの白石氏はKビジョン時代に、下松・熊毛地区の山陽道を、それぞれの地区を代表する郷土史家である河村蒸一郎（しょういちろう）氏と岩崎章氏をナビに起用して、紹介する番組を制作されておられたのだ。周南地区もぜひ撮りたいという意欲をお持ちだった。そして、企画展と並行して、ロケ撮りと放映が始まった。

また「歩こう」と銘打つなら実際に歩くイベントはやらないのかという周囲の要望を頂き、セキュリティやト

イレの確保の問題など様々な困難が予想されたが、「陶の道を歩く会」の中村秀昭会長のアドバイスを頂きながら、清水の舞台から飛び降りる覚悟で踏み出した。当時は、ウォーキング協会周南支部や周南市ボランティアガイド等は活動しておらず、のちにそれらのリーダーとなられる方々は、企画展やウォークに参加したりして勉強しておられたのを今ではなつかしく思い出す。

かくて、

①民俗資料館での「山陽道」企画展

②山陽道のウォークイベント

③地元のケーブルテレビの「歴史街道　山陽道の旅」の放映

という、いきなり三連立で華々しくスタートした。私にとって二〇〇八年は、〝山陽道元年〟というべく画期的な年となった。

その翌年に、NHKの「街道てくてく旅」がやって来るのである。この年にNHKのスタッフは企画展を見学に来られ、福川本陣前というロケ場所と、翌春には〝篤姫〟を話題とする台本の構想を立てられたのである。

篤姫の山陽道

忘れもしない。春と秋の企画展の間の九月の富海本陣でのCCSの番組のロケのとき、解説をお願いした富海史談会の伊藤義登会長から、「今、NHKの大河ドラマで放映されている篤姫様が富海を通られた。防府の資料館で、学芸員の鞆雅子さんの尽力で、その資料を展示解説されています」と教えられたのだ。一瞬、背中を冷や汗が流れたような気がした。（ならば間違いなく

2008.9.7.　CCS ロケ　富海本陣

福川に立ち寄っている）とすぐに思った。テレビでは、篤姫さんは瀬戸内海を船酔いしながら大阪に着いたことになっている。これから資料探しが大変になるぞ、と少し暗鬱な気持ちにもなった。

防府市文化財郷土資料館の「富海を通った天璋院篤姫」コーナーで資料を拝見した。冒頭に「九月九日　小郡宮市　福川」とある。嘉永六年九月九日の篤姫一行の日程であった。小郡出立、宮市昼休、福川泊と解すべきである。富海では小休止で午後三時頃の休息となる。先発隊だろうか、薩摩藩士一五人が本陣でご飯を食べている。篤姫は宮市（防府）で昼御飯であるから、先発隊は同じ頃、富海で昼食をとっており、そのあと到着の準備をしていたと推測される。

参勤交代（大名行列）ではないのだから、原作者の宮尾登美子氏が瀬戸内海航路を想定し、五〇人ぐらいの規模と予想するのは妥当な歴史的考察だと先稿で書いた。当然、時代考証家等のアドバイスがあったはずである。ところが、事実は小説より奇なりを地でゆくように、放映直後から九州辺りから薩摩お姫様一行通過の記録が相次いで報告されていた。とは言え、博多まで陸路、そこから船行というケースもあるので、慎重さが必要である。しかし、山口県内が陸路となると、もはや全日程陸路コースが確定的になる。

思いを深くめぐらすなら、どうして篤姫の江戸参府は、二六〇名という一五万石の大名規模の参勤交代仕立てで陸路をゆかねばならないのかという不可解さに及ぶ。島津斉彬の真の狙いはどこにあったのか？　江戸参府の一行の総指揮はなんと一九歳の篤姫である。のちの東海地方では、コース取りを自分で勝手に変更したりしている。また父斉彬が渡ったからと言って吉川（きっかわ）の制止を振り切って錦帯橋を渡っている。篤姫の行動原理はどこにあるのか？　興味のある方はぜひ当誌第三〇号史料紹介と第三一号研究の「篤姫と福川本陣」を読んでいただきたい。

この謎解きはテレビのサスペンスより面白かったと評判をもらっております。篤姫の性格の一端が、またのちの女傑とされる彼女の片鱗が垣間見れるかもしれませ

ん。

篤姫の江戸参府における考察である、本邦初公開の新説である。

県文書館や各市教委が地元の史料を発掘して、県内の篤姫江戸参府の全行程が明らかにされ、県文書館や各市の資料館で、資料の公開や企画展等が開催された。地元周南市でも、翌年一月に、篤姫の福川本陣宿泊を裏付ける資料「岩崎家文書」の公開と特別企画展「篤姫と福川本陣」が周南市新南陽民俗資料展示室で催された。街道筋にあたる各地方自治体を啓発した大河ドラマの影響力に敬服する。

篤姫の県内の通行は、参勤交代の日程の解明に、貴重な補完的データを提供してくれた。

参勤交代において、萩と三田尻を結ぶ萩往還と山陽道の交差路である宮市本陣（萩本藩）に大名の八割がたが宿陣し、次は花岡御茶屋（萩本藩）となるが、その中間が福川で、昼休である。

宮市（泊）―富海（小休）―福川（昼休）―徳山城下（清水屋／小休）―花岡御茶屋（泊）が、基本的な周南地域の参勤行程であると再確認できた。篤姫様は半日ズレて、小郡（山口市）出発―宮市（防府市）昼休―福川泊で、翌日は福川出発、花岡御茶屋昼休、高森泊であった。

花岡市―〈二五町〉―久米市―〈二〇町四〇間〉―遠石―〈一三町五〇間〉―野上―〈一里一二町四〇間〉―富田市―〈一九町〉―福川―〈一里五〇間〉―矢地―〈一里二二町〉―富海―〈三二町二〇間〉―浮野〈三二町一〇間〉―宮市。計七里三四町三〇間、約三二キロ。

篤姫一行が歩いた福川本陣～高森本陣間で、七里二八町一〇間、約三一キロ。前日の小郡～福川本陣間が約三七・五キロであった。

防府から花岡まで歩くと考えるだけで、自分の体力で

は気が遠くなりそうである。江戸まで四〇日続く。江戸時代の人の強靭な肉体を思わざるを得ない。

篤姫の江戸参府は、薩摩街道→長崎街道→山陽道→東海道経由（全陸路）と判明した。大河ドラマの関係者は居心地が悪くなったかもしれない。大河ドラマには功罪がある。作家の創作が史実と捉えられて独り歩きすることもあるが、町興しはもとより、あまりポピュラーでなかった歴史上の人物にスポットが当たり、より立体的に歴史が認知されたり、今回のような歴史研究の促進など、良いところも多い。私は大河ドラマの支持者である。

矢掛（備中）や草津（近江）をはじめ、日本全国の篤姫の足跡を示す資料が出てきて、新たな研究の地平が提示された。篤姫が山陽道でもその存在感を十分に発揮してくれたことがとても嬉しい。私にとって入り口は山陽道からだったけど、すっかり篤姫ファンである。

翌年には、ＮＨＫＢＳ「街道てくてく旅」で、「篤姫は福川本陣に泊まっていました」と福川から生中継をやっているのだから、その国民的テレビの順応度の高さも評価すべきであろう。「山陽道」における不思議なめぐり合わせには、運命的なものを感じた。

〔補記〕

「山陽道を歩こう」はお陰様で、二〇一六年の秋の陣（十一月三日。呼坂本陣→花岡御茶屋）で一五回目を迎えました。

タイミングよく取材が入り、毎日新聞の第一日曜日の折込となる地域情報新聞『ふれあい毎日』（二〇一六年一二月五日号）の一面でフルカラーで扱ってもらいました。仮装して歩くメンバーたちの一人一人も紹介してもらい、今までの継続の努力へのご褒美だったと思っています。

これからもよろしくお願いします。

未だ山陽道、究め難し。